

# 史遊会通信

No.240号  
平成27年  
3月10日

編集  
042-754-9360  
arai-hiroshi@  
jcom.home.ne.jp  
新井宏

## 二月講演要旨

### ドラッグ(薬物)の歴史と今日の問題

漆原直子

#### 【ドラッグとは】

「薬」は、一般に病気の治療、診断、予防に用いられる薬剤をさす。薬事法では医薬品として定義され、厚生労働省によって承認申請や取扱いが規制されている。歴史的には薬

に関する最古の記述は、紀元前五千年頃のメソポタミアの粘土板に刻まれたものである。(『ブリタニカ国際百科事典』より)

「薬」は、英語では「drugドラッグ」というが、今回お話しする「ドラッグ」というのは、「気分に変える物質」のことを言い、いわゆる嗜好品、法律で使用する規制、又は禁止されている物質を指す。例えば、嗜好品では、酒(アルコール)、タバコ、ココア、茶、コーヒー、コカ・コーラ、法律で規制又は禁止されているものが、トランキライザー(精神安定剤)、抗ヒスタミン剤、笑気ガス(亜酸化窒素・麻酔剤)、大麻、覚醒剤、アヘン、コカイン、LSD、シンナーである。

#### 三月の例会

史遊会通信二三九号で、三月の例会を、三月二十五日(水)とお伝えしましたが、三月二十四日(火)の誤りです。お詫びして訂正いたします。お間違えのないように。

三月二十四日(火)です。

例会のお知らせ

#### ◎ 三月例会

日時 平成二十七年三月二十四日(火)

午後六時十分～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 太田 精一氏

テーマ 日露戦争のもたらした

世界史的意味

四月号自由執筆 平山善之、小田紘一郎、

隆恵の諸氏 締切三月末

#### ◎ 四月例会

日時 平成二十七年四月二十二日(水)

午後六時十分～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 村上 邦治氏

テーマ 未定

五月号自由執筆 中込勝則、三戸岡道夫、

安田保之の諸氏 締切四月末

これらドラッグは、その物質の生成由来から次のように分類される。

① 内因性物質(endogenous drugs: 語源は内

で作られた”を意味するギリシア語)

- ・ エンドルフィン || いわゆる「脳内麻薬」「脳内モルヒネ」とも言われるもので、アヘンによく似た物質で、陶酔感や苦痛の減少などの作用がある。「ランナーズ・ハイ」というマラソンなどで長時間走り続けると気分が高揚してくる作用は、このエンドルフィンによると考えられている。
- ・ アドレナリン、ノルアドレナリン || 興奮作用のあるホルモン
- ・ セロトニン || 鎮静作用、中枢神経系内の伝達を遅らせる科学物質
- ・ 性ホルモン || 抗鬱剤
- ・ DMT(ジメチルトリプタミン)に近い物質 || 松果体(脳内の中央部にある内分泌器)から分泌されるホルモンで幻覚作用をもつ。

② ナチュラルドラッグ

- ・ 天然のままのもの(生薬) || 薬草
- 薬物の使用にあたっては、植物そのままの天然の薬物が、人体に対しては穏やかな作用で最も安全性が高い。
- ・ 精製されたもの || 薬草から抽出、精製されたもの。手軽にできるため、不純物も混入しやすい。

③ 半合成ドラッグ 精製されたナチュラルドラッグより、その化学構造を変化させて特性を変えたもの。

(例) LSD(リゼルゲ酸ジエチルアミド・リゼルグ酸はライ麦などの穀物にとりつく麦角菌に含まれる化学物質)

④ 合成ドラッグ 実験室で無から作り出される完全な合成薬物で、自然には存在しない物。

(例) PCP(フェンサイクリジン)幻覚剤、セコバルビタール(向精神薬) 等

また、これらドラッグはその作用により、主に、抑制、幻覚、興奮又は覚醒の三種の類に分けられる。

**抑制剤** || 神経系のエネルギーレベルを低下させて外界の刺激に対する感性を弱め、多量に服用すると眠気をもたらす。過剰摂取は、脳の生命中枢を妨げて死に至る可能性があり、興奮剤より危険である。

(例) アルコール、眠剤、精神安定剤、アヘン、ヘロイン

**幻覚剤** || 医学的には幻覚を誘発する物質。

愛好者は、サイケデリック(ギリシア語の“精神の顕在”を意味する語)・ドラッグとして、人間の精神の未使用の潜在能力を引き出すことができる物質としている。

植物等元々自然界に存在するものと、化学者により実験室で作られ出されたものがある。

人類は原始より幻覚作用のある植物やキノコ

を食したり、煎じて飲む、タバコのように喫煙して摂取するなどして、神聖な儀式を行ってきた。なお、これら幻覚作用のある植物は南北米大陸に多く自生している。

(例) ヒルガオの種子、マジックマッシュルーム、ペヨーテ(\*)・サボテン(和名ウバタマ)、ヤヘイ(コロンビアでの呼称)等

\* アズテック語の「青虫」の意味の「ペヨトル」が語源。

\* ヤヘイは、ケチュア語では「アヤワスカ」と言い、「魂のつる」、「死者のロープ」を意味する。

**興奮剤(覚醒剤)** || 神経系に刺激を与え、興奮させることによって、人をより鋭敏に、精神的に感じさせる。

(例) コーヒーやその他のカフェイン含有植物(マテ茶、チョコレート)、コカ(コカイン)、アンフェタミンなどの合成薬物(シヤブ || スピード)、タバコ(ニコチン)

こうした薬物は、著名人も用いていた。

ヨハン・セバスチャン・バッハ

独の作曲家 コーヒー中毒者

オノレ・ド・バルザック

仏の作家 コーヒー中毒者

サミュエル・テイラー・コールリッジ

英の詩人 アヘン

シャルル・ボードレー

仏の詩人 アヘンとハシシ

アレクサンドル・デュマ

仏の作家 ハシシ

エドガー・アラン・ポー

米の作家 アヘン

ジクムント・フロイト

喫の精神分析学者・精神科医

初めにコカイン、後年タバコ・葉巻

ヴィクトリア女王

英の女王 ハシシを生理痛時に服用

ディエゴ・リベラ

墨の画家 マリファアナ

これらの薬物を用いた時に問題となるのが乱用、依存、中毒であり、自傷他害の恐れ、最悪の場合は死に至る。ドラッグによる人体への毒性は、程度に差がある。アルコールはヘロイン並の毒性があり、マリファナは精神依存をきたすが、身体依存や耐性形成は無く、急性・慢性の精神毒性もあるかどうか判明していない。最近問題になっている「危険ドラッグ」は、法で規制されている麻薬の化学構造の一部を変えることにより合成されたものである。麻薬とは似て非なるものである故、法律の規制から外れるので、「脱法ドラッグ」と呼称されていた。

薬物依存症・中毒症を治療するための特效薬は無い。が、適切な指導を受け続けて、薬物を使わない生活を繰り返し返せば、社会人として何の問題もない生活をおくることができる。

それを「回復」という。「回復」には、次の四つの段階がある。

①薬物によって疲弊し衰弱した身体が正常化するという「**身体**の回復」の段階

②物による幻覚・妄想がなくなり、思考力や記憶力が正常化するという「**脳**の回復」の段階

③薬物依存症によって歪んだ物の考え方、感じ方、生活習慣が正常化するという「**心**の回復」の段階

④薬物依存症によって壊れた人間関係が修復され、周囲からの信頼をとりもどすという「**人間関係**の回復」の段階

その回復のために、以下のことを実践する。

- ・外来治療が基本 専門の医療機関の受診・一時的に薬物が手に入らない環境をつくる必要がある場合には、入院も必要
- ・「治す」というよりは、薬物依存症を糖尿病や高血圧症のような慢性疾患としてとらえて、薬物を使わない生活を続けるという自己コントロールの継続が目標となる。
- ・そのためには、それまでの薬物使用に係っていた状況（人間関係、場所、お金、感情、ストレスなど）を整理、清算し、薬物を使わない生活を継続させることが必要である。

・一人での決意はほとんど持続しないため、これらの整理・清算を認知行動療法を用いて体系的に習得させてくれる医療施設や相談所に通い続けるか、ダルク（Drug Addiction Rehabilitation Center）や NA(Narcotic Anonymous)などの自助活動に参加し続けながら、薬物を使わない生活と新しい仲間をつくるのが大切となる。

これは、アルコール依存症の治療、回復過程とも共通している。

【大麻の歴史】  
大麻とは、アサの花冠、葉を乾燥または樹脂化、液体化させたものである。アサ（麻、Cannabis）は中央アジア原産とされるアサ科アサ属。一年生の草本。「マリファナ」はメキシコ独自の口語的表現。スペイン語では「カニャーモ」。大麻草の学術用語は「カンナビス（ギリシア語）。英語では「ヘンプ」。日本の大麻取締法における、「大麻」の定義は、「大麻草（カンナビス・サティバ・エル）及びその製品をいう。ただし、大麻草の成熟した茎及びその製品（樹脂を除く。）並びに大麻草の種子及びその製品を除く。」である。大麻は人類の歴史には大きく関与している。大麻の足跡、日本列島人との関係も追ってみてみたいと思う。

【ユーラシア大陸の大麻使用の痕跡】  
①ゾロアスター教 開祖ザラスシュトラ（ゾロアスター、ツァラトウストラ）前六三〇年？～前五五三年

前六世紀アケメネス朝ペルシア建国時には、すでに王もペルシア人のほとんどが信奉し、聖火の中に大麻を投じて祭祀を行っていた。

『アヴェスター経典』には、大麻からつくられたバンハ(Banha)、バング(bangha)のことが書かれているという。ちなみに、「バングラデシュ」は“大麻が生える大地”を意味すると言われる。

## ② 仏教 開祖ゴータマ・シッダールタ

前五世紀より儀式に大麻草を使用してきた。また、シッダールタ自身、悟りを開く前から大麻草を喫煙し、大麻草の種子や花穂なども食し、その結果心理にたどりつき、仏陀になったという説がある。密教の護摩においても、火中に大麻、芥子、血液、毛髪等臭気を発する物を投じて、その強烈な臭気で五感を麻痺させるという。

## ③ 前四世紀のスキタイのバジリク古墳(\*)から出土した2個の青銅製の容器と六本の棒(エルミタージュ博物館に収蔵)

この古墳は、東カザフスタンアルタイ山脈の、ミヌシンスク近くにあるスキタイの遺跡である。この青銅製容器の一つは、釜形の鍍(ふく)で、火で焼かれた石がたくさん詰められており、その石の間には炭化した大麻の種子があった。もう1つは、取っ手のついた4本脚の四角形青銅容器である。六本の棒には上部が紐で結び合わされ、毛氈で覆われていた。

なお、バジリク古墳は、匈奴の文化圏とも重なり、この古墳を匈奴の遺跡とみる見方もある。また、匈奴自体をスキタイの一部とする捉え方もある。

## ③ 前五世紀の歴史家ヘロドトス著 『歴史』(岩波文庫版) 巻一、四

巻一 一〇二 アラクセス河の中の島に住むとされたマツサゲタイ人の風習の様子

…そのほか彼らが発見した樹の中には、次のような変わった実の生る樹があるという。彼らがタ大勢一所に集まって火をおこすと、火を囲んで車座となり、この実(\*)を火の中に投げ込む。火中に投ぜられた実の焼けるにおいを嗅ぐと、あたかもギリシア人が酒に酔うように彼らはそのおいに陶酔するのである。投げ込まれる実の数が増えるにつれて、彼らの酔いも増し、遂には立ち上がって踊り歌うに至るといふ。…

(\*)この実は、大麻の実と考えられている。マツサゲタイ人も身なりや文化がスキタイ人と似ており、同族と見られている。

## 巻四 七四、七五 スキタイ人の大麻使用の様子の記録

七四 スキユティア地方では、太さや丈は違うが他の点では亜麻によく似た大麻が生育する。…

七五 スキユタイ人はこの大麻の種子を手にもって毛氈の幕の下にくぐり込み、そ

の種子を赤熱した石の上に投げる。投げられた種子はくすぶりだし、やがてギリシアの蒸風呂ではとても及ばぬほどの湯気を発する。スキユタイ人はこの蒸風呂で上機嫌になって大声でうなりたてる。…

## ④ 中国新疆ウイグル自治区鄯善県洋海村の洋海遺跡出土のミイラと大麻

この遺跡は、火焰山南麓にある総面積五・四万㎡の広大な墓地で、前千年から紀元前後にかけて営まれた。かつて「楼蘭国(現地音は、クロラインナ)」が栄えた地だが、前七七年の圧力により「鄯善国」に改称させられている。

この洋海遺跡からは、一〇〇〇基以上の墓と、六体の男女のミイラ、六〇〇個以上の頭蓋骨が発見されている。中でも、大麻草を手を持つ白色人種のシャーマンの2体のミイラが発見されている。羊皮コートに羊毛セーター、羊革帽子に革靴、腰には革袋という遊牧騎馬民族スタイルをしており、きらびやかな装身を身に着け、手に大麻草と祭祀具と思われる銅片を螺旋状に巻いた短い棍棒や刃の無い青銅斧等を持ち、脚には銅管、銅鈴を着けていた。明らかにシャーマンスタイルで、頭蓋骨の特徴から、コーカサス人とモンゴル人の両方の特徴を備えているという。もう一体のミイラは、頭部に皮編みの草籠が置かれ、中には大量の大麻の葉と茎が詰め込まれていた。

さらに、帝王切開術(\*)の跡がある女性のミイラが発見されている。傷口は馬の毛で縫い合わせられており、大麻を麻酔剤として使ったのではないかと考えられている。

\*「帝王切開」は、ローマ皇帝ジュリアス・シーザーの出生時に、通常分娩を不浄視し、母親の腹部を切開して取り出したことに由来する。帝王切開を医療関係では、「カイザー」「帝切」等と略称している。

### ⑤ 中国黒竜江省双鴨山市遼？兔嶺(こんとれい)遺跡から出土した炭化大麻種子

この遺跡は漢代の住居跡だが、住居北よりの中央に火を焚いて固くなった円形焙焼硬面等があり、そこから炭化した大麻種子が出土していた。この遺構は祭祀を行った神殿と考えられ、司祭や集まった人々が幻覚状態になるために、大麻種子を焚いていたのではないかとされる。また、この地はかつて挹婁(肅慎の後裔)の国とも重なるようで、『後漢書挹婁伝』によると、挹婁は穴居生活をして豚を飼育し、五穀と麻布を産出していたという。

### ⑥ マルコ・ポーロ『東方見聞録』：暗殺教団「山の老人」

後一一年イラン北方の山岳地帯のサミラン峠にあったイスラム教徒の城塞で、ここを根拠地とする暗殺教団(アサシン集団)「山の老人」が大麻で若者を支配し、暗殺者に仕立て

上げていったという伝説が、マルコ・ポーロの『東方見聞録』の中で紹介されている。実際にはセルジューク・トルコと敵対していたシーア派のニザール派の拠点であったが、モンゴル軍により壊滅された。“暗殺”を意味する英語の“アサシネーション”は大麻樹脂の“ハッシシユ(アラビア語)”から“アサシン”となり、アサシネーション”となったとされる。

### 【日本への伝来】

① 縄文・弥生時代の遺跡から麻の種子が出土している遺跡がある。最も数が多いのは、奈良県桜井市纏向遺跡で、五三五粒出土している。次に多いのが、北海道苫小牧市柏原五号遺跡で三五七粒、青森県八戸市は川遺跡の一・二六粒となる。相対的には、北海道が多く、東北、北陸の順になり、東高西低の傾向になる。また、全く出土していない地域もあり、東北では岩手、山形、関東地方(千葉県以外)、四国、九州(佐賀県以外)等がある。これらの麻の種子は、栽培用としての種子とも考えられるが、纏向遺跡、是川遺跡からは炭化種子が発見されている。

是川遺跡では、縄文時代晩期の遺跡から、鬲状三足土器、飾り杖・弓、縄文琴、赤色漆塗り木柱、朱(弁柄)染め人骨なども出土しており、シャーマンによる祭祀が行われていたのではないかと考えられる。「鬲状三足土器」

は青森県内でのみ出土している非常に珍しい土器である。「鬲」というのは三つの足を持つ湯沸し用の土器で、中国の殷から西周、漢に至る間の東北部で盛んにつくられた「鬲」と似たような形状をしている土器を「鬲状三足土器」と呼称している。大陸との関係を伺わせるものであり、大麻の文化も一諸に伝来してきたことが想定される。

纏向遺跡では、神殿と思われる大型建物遺構のすぐ傍らの土坑から麻の種子が出土したが、他に三〇〇個以上の桃の種子が同じ土坑から出土した。ただ、麻の種子は炭化しておらず、煮沸した後もないのでどのように祭祀に用いられたかはわからないが、桃の実も呪術的な意味を持つものであり、何らかの祭祀に使われたことは確実であろうとされる。卑弥呼は、鬼道を用いて人を惑わせたというが、ひよっとしたら大麻を用いていたのではないか・・・。

### ② 『日本書紀』巻第一九 欽明天皇五年

一二月に、越国言うさく、「佐渡嶋の北の御名部の碕岸に、肅慎人(みしはせのひと)有りて、一船舶に乗りて淹留る。春夏捕魚して食に充つ。彼の嶋の人、人に非ずと言す。亦鬼魅なりと言して、敢て近つかず。嶋の東の禹武邑の人、椎子を採拾ひて熟し喫まむと為欲ふ。灰の裏に着きて炮りつ。其の皮甲、二人の人に化成りて、火の上に飛び騰ること一尺余許。

時を経て相闘ふ。邑の人深く異しと以為ひて、庭に取り置く。亦先の如く飛びて、相闘ふこと己まず。人有りて占へて云はく、『是の邑の人、必ず魅鬼の為に迷惑はされむ』といふ。久にあらざして言ふことの如く、其に抄掠めらる。是に、肅慎人、瀬波河浦に移り就く。浦の神厳忌し。人敢えて近つかず。渴ゑて其の水を飲みて、死ぬる者半に且す。骨、厳岫(いはほのくき)に積みたり。俗、肅慎隈みしはせのくまと呼ぶ」とまうす。(岩波文庫版より引用)

この記述内容は、里人が、肅慎人が麻の種子を火中に投じて大麻を吸引して幻覚症状をきたしている様子を見て、麻の種子が椎の実に見え、また自分たちも煙を受動吸煙したことによる幻覚状態に陥ったのではないかと思われる。

### ③『播磨国風土記』 揖保郡麻打山条

昔、但馬国の山中に出石君(\*)マラヒが住んでいた。夜、その家の女二人が麻を打っているうちに、胸の上に麻を置いたまま死んでいたという。故にこの山は麻打山と名づけられた。今ではこの近隣に住むものは夜になると麻を打たない。

(\*)この出石君(伊頭志君)は、渡来した新羅王天日矛を始祖としている。

### ④『万葉集』

卷一四(東歌)

上野 安蘇の真麻群 かき抱き

寝れど飽かぬを 何どか吾がせむ  
群馬の安蘇で取れる麻束を抱いて寝ても満足できない、いったいどうしたらいいのか、と一般的には男性が歌ったとされているが、麻を栽培して収穫するまでの仕事は女性が担っている。この歌は、麻に睡眠導入剤の作用があることを知っていて、麻束を抱いて寝る習慣があつたが、それでも眠れないという意味ではないかという見方もできる。

### ⑤『続日本紀』 聖武天皇天平元年二月

長屋王の変

長屋王が「秘かに「左道」を学び、国家を傾けんとす」という密告により、兵士らにより邸を包囲され、一族共々自害に追い込まれるという事件である。一般的には、藤原氏対長屋王という政権争いの結果という解釈で終わるが、この「左道」という言葉の意味は大変重要である。これは「妖術」を意味し、中国の北魏以降の文献によく使われているという。そして事件後四月には以下のような詔を発している。

内外の文官・武官と全国の人民のうち、異端のことを学び、幻術を身につけ、種々のまじない・呪いによって、物の命を損い傷つけるものがあれば、主犯は斬刑に、従犯は流刑に処する。もし、山林にかくれ住み、偽って仏法を修行するといひ、自ら教習して業を教え伝え、呪符を書いて封印し、

薬を調査して毒をつくり、様々の怪しげなことをして、勅命の禁ずることに違反する者についても、その罪は同罪である。その妖術・妖言の書物については、この勅が出たから五十日以内に自首せよ。もし、期限内に自首せず、後になって告発された場合は、主犯・従犯を問わずすべて流罪にするであろう。その告発した人には絹三十疋を賞として与えるであろう。その絹は罪人とされた家から徴発する

(『続日本紀』(上) 全現代語訳 宇治谷孟 講談社学術文庫版引用)

\*癸亥。三勅。内外文武百官及天下百姓。有學習異端蓄積幻術。壓魅咒咀害傷百物者。首斬從流。如有停住山林詳道佛法。自作教化。傳習授業。封印書符。合藥造毒。萬方作恠違犯勅禁者。罪亦如此。違犯勅禁者。罪亦如此。其妖訛書者。勅出以後五十日內首訖。若有限內不首後被糾告者。不問首從。皆咸配流。(原文『日本古代資料本文データ』HP引用)

長屋王のこの事件は、「左道」が原因で、この詔は再発防止のために発せられたと考えられる。長屋王の邸宅は作宝楼といい、新羅や渤海の客が出入りし、大陸由来の様々な文物・薬物を手に入れていたと思われる。「長屋王の木簡」の中に、「遣交易渤海使」と書かれた木簡が見つかっている。また、それらの異

国の客をもてなすために、犬をたくさん飼育していた。餌としては米飯を与えていたようで、飼育のための覚書と思われる木簡2点が出土している。「犬六頭料販六升」と「犬四頭飯八升」である。中国では犬は犠牲獣であった。邸ではこうして内外の客を招いての宴が繁盛に行われ、そこでは大麻も使用されていたと考えられる。松本清張氏によると、「作宝楼」は「佐保」という地名にあるが、この「サホ」は、ペルシア人の集団を統率する役職「サッポー」の日本語化で、このあたりにサッポーが住んでいたのではないかとする。

⑥『古語拾遺』斎部広成撰 大同二年日神の石窟幽居条

：長白羽神（伊勢国の麻読（おみ）が祖なり。今の俗に、衣服を白羽と謂ふは、此の縁なり。）をして麻を種多て、青和幣（古語に爾伎豆といふ。）と為さしむ。天日鷲神と津咋見神（つくひみのかみ）とをして穀（かぢ）の木を種殖多て、白和幣（しらにぎて）（是は木綿なり。已上の二つの物は、一夜に蕃茂れり。）を作らしむ。（岩波文庫版より引用）という記述があるが、この中の「一夜に蕃茂れり」という表現が、大麻の幻覚作用による幻視ではないかという見方がある。忌部氏は中臣氏とともに祭祀を司る氏族であったが、その地位を中臣氏に奪われ、権威を失ってしまった。『古語拾遺』はその不当性を訴えるた

めに、忌部・斎部氏により編纂されたものである。忌部氏は祭祀を司るにあたり、麻の栽培をして和幣を作ったとされる。また、阿波国より麻の栽培地を求めて、安房国へ海路にて上陸し、さらに北上して常陸国に至る。

### 【結語】

薬物も大きく歴史に関わってきた。人は何かに依存せずにはいられない。依存の対象が変わるだけ。自他ともにより安全なものに依存するのがよい。

アルコール・ニコチンは合法薬物、大麻などは非合法薬物とされるが、その規定がされたのは現代にいたってからである。タバコがスペイン人によつて、「新世界」よりヨーロッパにもたらされた時、当初は非常に危険視され、所持しているだけで死刑になったという。しかし、最近ようやくまた、人類が古来から使用している薬物については、民族的伝統にのっとりた使用法であれば、一部認められるものもでてきている。コカ、ペヨーテ・サボテン等。ペヨーテ・サボテンの使用を一部認められるようになってからは、アルコール依存症から回復した、インディアンがいう。

コカイン、アヘンの歴史も大変興味深いので、さらにまた深めたいと思う。

（了）

### 参考・引用文献

・『チョコレートからヘロインまで』A・ワイル / W・ローセン著 第三書館  
 ・『大麻草と文明』ジャック・ヘラー著 築地書館

・『大麻と古代日本の神々』山口博著 宝島新書  
 ・『古代文化回廊 日本』山口博著 おうふう  
 ・『古語拾遺』斎部広成撰 岩波文庫  
 ・『日本書紀』岩波文庫  
 ・『続日本紀』講談社学術文庫

## 三月講演予告

日露戦争のもたらした

世界的意味

太田 精一

日露戦争はその後の日本とアジアにとってきわめて大きな影響をもたらした戦争であった。

ポーツマスの講和会議を巡る日露の綱引と周辺諸国の駆け引き、その後の欧米諸国及びアジア・アフリカにどのような影響を与えたかについて論及する。

自由執筆

## 生涯を「義」に生きた勝海舟

諸橋 奏

幕末・明治の政治家、勝義邦(通称麟太郎、海舟は号)は文政六年(一八二三)正月三十日、江戸本所亀沢町(現両国四丁目)に生まれた。

父は勝惟寅(男谷家より養子・小吉)母は勝信。男谷家・勝家の隆盛のものは、海舟の曾祖父男谷検校(本名米山銀一)であった。検校は元禄十四年(一七〇一)、越後国刈羽郡長島村(現柏崎市長島)の生まれで、少年時に盲目となり、江戸に出府、勤勉実直・質素な生活の末、財をなし、盲目最高官位の検校まで上りつめた人物。一方、父小吉は「本所の旗本勝小吉は貧しい極道者」と自認する江戸っ子。その小吉が「鶯谷庵独言」の中で、息子勝義邦は実銘(まじめ)で親孝行、とべた褒めしている。海舟にとって曾祖父もこの父も人生のよき教師だったのであろう。

海舟十六歳の時、父小吉は隠居(号は夢酔)し、家督を相続するが、海舟後年の語り『氷川清話』でその暮らしぶりを「非常に貧乏で、(中略)昼といへば破れたのが三枚ばかりしかないし、天井といへばみんな薪につかってし

まって、板一枚も残って居なかった」と記している。

そんな生活の中で海舟は住み込みで剣術修行をし、蘭学を学び、生来の賢知を磨いて、嘉永三年(一八五〇)二十八歳で、先年本所から転居した赤坂田町に私塾を開設、蘭学と西洋兵学を教えるまでの学識者になった。

その向学心に燃えていた赤貧の二十代、立ち読みを常としていた小さな書物屋を介して知りあつた箱根の商人渋田利右衛門が、若き海舟の器を先見して後援者になった。この人物について海舟は『氷川清話』で詳しく談じている。「おれもこの男の知遇にはほとほと感激して、いつかはこれに報ゆるだけの事はせうと思つて居たのに、惜しいことには、渋田はおれが長崎に居る間(安政二年〜安政六年)に死んでしまった。こんな残念な事は生まれてからまだなかったよ」と。更に渋田は海舟が長崎に行く前に、万一のとき頼りになる人と、灘の酒屋嘉納治右衛門、伊勢の豪商竹川竹齋、紀州の豪商浜口梧陵の三氏を紹介する念の入れようであった。事実、この三人は折々に、世話になった。海舟はこの行き届いた恩義に対し「御維新前に箱館奉行に談を(はな)して、渋田の遺書をいっさい奉行所で買い上

げて、その子孫には帯刀を許すようにしてやった」と最高の礼で報いた。

貧乏旗本の出で、上下に頼るべき者のいない海舟は、この援軍を力にして勉学に励む。そしてこれが彼の開運に繋がる。

無役の小普請組ながら二十代で蘭学塾を開いていた海舟を見出し、蕃書翻訳勤務に登用したのは海防掛目付の大久保忠寛(号は一翁)、海舟より六歳年長の開国論者であった。一翁(文化十四年〜明治二十一年)は、ペリーが浦賀に来航した嘉永六年(一八五三)、ロシア使節プチャーチン来航事件に対応して設けられた海防禦体制調査団の一員に、出仕したばかりの海舟を加えてくれた。その折り、安政二年(一八五五)、大阪西町奉行の川村修就(寛政七年〜明治十一年)に出会う。修就は海舟より二十八歳年長で海防の第一人者であった。

二週間にわたる現地視察と海防体制の協議の間、海舟は修就から、知識を現場に活かす術を教示され、その後も長崎海軍伝習所時代や攝海砲台築造時など多大な助力を受けた。修就は、出世の糸口を与えてくれた上、その後も助力を惜しまなかった一翁と共に、幕臣時代最も恩義を受けた人であった。しかも、海外事情に接することで海舟はその視野をさらに広げることとなる。二度のアヘン戦争(一

八四〇〜四二、一八五六〜六〇)の結果、中国が西欧列強の半植民地と化し、一八五八年にはインドがイギリスの植民地になったこと、加えて海舟自身、万延元年(一八六〇)二月二十五日〜閏三月十八日の間、サンフランシスコに滞在の機会を得、列強新鋭アメリカの近代文明に直に触れたことで、己がなすべき道を自覚する。

海舟三十八歳、蕃書調所頭取の時である。

国際問題も絡んで揺らぐ幕藩制下、幕府の指導者としてなすべき大義とは何か「日本国(領土・人民・主権)を守ることに尽きると海舟は確信、そしてそのためには「いかなることもあるとも内乱を起こしてはならない。欧米列強に介入の口実を、植民地化の機会を、与えることになる」との強い信念をもつに至った。坂本龍馬(天保六年〜慶応三年)が海舟と公議政体論者で同派閥の松平慶永(号は春岳)の紹介で海舟を訪ねて来たのは文久二年(一八六二)。海舟の大義に感服、その場で弟子になり、幕末最強の師弟が誕生する。龍馬は海舟の意を体して尖兵となり、大政奉還の奇策の原案を作成、成就(慶応三年十月十四日)させるが、十一月十五日京都で暗殺される。享年三十三歳。

しかし、將軍職辞退により政局の主導権をとり目論んだ徳川慶喜のこの妙案に対し、薩摩を中心とする倒幕派は慶応三年十二月九日

(太陽暦一八六八年一月三日)クーデターで反撃、王政復古の大号令が発せられた。そして翌四年一月三日の鳥羽・伏見の戦い(戊辰戦争開戦)に発展、倒幕派が勝利する。新政府の慶喜追討令が発令され、政局は一挙に進展、政府軍は江戸攻略を目指して進発。三月十三・十四日、幕府側の軍事取扱勝安房(海舟)と政府軍参謀西郷隆盛との話し合いで「老獪なる西欧列強と新興勢力アメリカの脅威から日本の国と民を何としても守らなければならぬ」との大義を共有して、勝と西郷は同行の士となり、「江戸無血開城」を決め、四月十一日に引き渡しを終了する。

新政府七月十七日、江戸を東京と改称、九月八日、慶応を明治と改元した。

海舟はその後も戊辰戦争の推移に意を払い九月二十二日会津落城で大勢が決したのを見届けて、明治元年(一八六八)十月十一日、東京を離れ駿府藩(藩主徳川家達)に向向する。しかし、翌二年幕臣・勝からの脱皮のため、安房守を安芳と改名、新政府任命の外務大丞・兵部大丞の官職はこれを辞退、十二月に

は徳川家に「退身願書」を提出してけじめをつけた。

海舟四十七歳であった。

海舟にとっても明治維新は古今未曾有の大事件であったが、彼の大義「日本国と人民のために、人としてなすべき道に身を賭す」の信念は幕府時代も維新後の明治政府になっても不変であった。静岡滞在中の静岡藩政補翼の時には、慶喜を警護してきて版籍奉還(明治二年)で家禄も失った旧幕臣約三百人と幕藩体制下の川越制度廃止で失職した人足約百人の自活の道のため、政府奨励の茶畑開墾事業推進に協力の労を惜しまなかった。

また静岡より明治五年(一八七二)に帰京してからの後半生、新政府が任命した官職、参議兼海軍卿(明治六年十月二十五日)・枢密顧問官(明治二十一年四月三十日)を受諾する一方、元老院議官任命(明治八年四月二十五日)・貴族院伯爵議員互選を辞退したのも、大義の実行に有用か否かの判断によるものと理解出来る。また大義遂行の同行の土西郷隆盛の名誉回復に奔走、遺児寅太郎の参内を果たした(明治十七年四月二十五日)。次いで、大義最優先のため犠牲を強いた徳川慶喜についても意を用い、慶喜の十男を養子にむかえた

り、明治三十一年には参内の上、天皇・皇后に拝謁、その名譽回復に尽力した。

また海舟には端折れない数々の逸話が…。

偶、私の手もとに、哲学館(現東洋大学)創立者井上圓了の献字付書がある。「巴里街頭夜色清 樹陰深処電灯明 滿城人動春如湧 酌月吟花到五更 録巴里雜詠一以贈○○君」。

井上圓了(安政五年〜大正八年)は越後長岡生まれ、寺育ちの哲学者。

明治二十三年(一八九〇)、圓了が哲学館の新校舎建設に着手したころ、宮内省から福沢諭吉の慶應義塾へ恩賜金が下されたのを知り、教育に関心をもっている枢密顧問官の海舟を頼って哲学館への支援助力を請った。海舟はこの時「私学経営者はあくまで独立自活すべき」と説き、打開策として自らが全国を講演巡回し、資金を作ることを教えた。圓了はこの資金調達方法を実行、延二十七年間、講演日数は三千六百日余に及んだという。海舟もまた終生、圓了を指導・激励、揮毫・支援を続けた。圓了は「海舟翁は実に精神上の師なり」と尊敬した。

同志社を創立した江戸っ子・新島襄(天保十四年〜明治二十三年)にも圓了と同じ助言をしたという。

そもそも海舟は人造りは国造りであるとの信念をもち、自らも若くして私塾を開き、訪米後は將軍家茂から直接許可を得て神戸海軍操練所を設立(元治元年・一八六四)したほどの教育熱心、而も門下生は広く身分や藩を越えて平等に扱った。また、明治八年、森有礼が開設した「商法講習所」(日本最初の商業学校、一橋大学の前身)の所長兼教師のアメリカ人、

ウィリアム・コグスウェル・ホイットニー家の有力な後援者となり、同校に多額の寄付をした他、一家の住居を勝家の所有地に建築し、その家族の生計まで援助した。更に、幕府最後の会計総裁に任命(慶応四年一月二十三日)された盟友一翁とともに徳川家の資金運用を任され、旧幕臣の生活扶助のために使用したが、明治四年(一八七二)、この徳川家の私費で五人の若者を米国に留学させた。その中に一翁の息子三郎と修就の孫の清雄(維新の洋画家)も含まれていた。

海舟の旧幕時代の恩人、大久保一翁と川村修就への恩返し気持ちと共に、「大義とは何か」を己に悟得させたアメリカ留学の有意義さを次世代を支える若者達に知ってもらいたいとの思いもあったと思われる。

その清雄が帰国後失職し窮地に陥った時、ホイットニー家同様、赤坂氷川の自邸内に清

雄のための画室を建てて支援し、衣食の世話までして我が子のようにかわいがった。かつての渋田利右衛門を偲んでの報恩だったのであろう。

勝安芳いうところの「毀誉は他人の主張」(氷川清話では「批評は人の自由」)に従えば…。

海舟は生来の賢知を自己研鑽し「利害を捨てて、人として行うべき道、人道・国家のためにつくすこと、大義」を己の不動・不変の信念として構築、公人としては忠義を、私人としては恩義を重んじた大人物、外国からは「世界が尊敬する日本人」と評される国際人として、明治三十二年(一八九九)一月十九日自宅にて死去。享年七十七歳。

自由執筆

## 出雲大社再考(六)

国造家の慶事と縁結びの神様

村上 邦治

昨年十月、第一二三代大正天皇の尊孫高円宮典子女王と、第八四代出雲国造千家尊祐官司の長男国麿権官司の結婚式が、古式ゆかしい装束により、出雲大社拝殿にて行われた。式場の中央には、天之御柱が据えられた。これは古事記にある、イザナギとイザナミの結婚に際し、天之御柱を回り出会って結婚した、という故事に見習ったものである。まさに、神代が現代に蘇ったのである。

五月婚約記者会見において、国麿権官司は、千家家初代が、皇祖神天照大神の次男とされていることに触れ、「二千年を超える時を経て、大国主神のお導きにより、今日を迎えたことに、深いご縁を感じております。」と、この度の結婚が、大国主神の御神徳であることを、強調したのである。

出雲大社は古来より、「縁結びの神」として、多くの参拝者を集めてきた。しかし、大国主神が縁結びの神であるとする、『記紀』の記載はどこにもない。明治十年代、神道教義をめ

ぐり、大論争が続いた祭神論争において、出雲派が主張した大国主神の功績は、国土を平定・経営した国造りであり、さらに幽冥界を主宰し、神社を統率したことである。縁結びについては、一切言及はない。

出雲大社による説明では、記紀神話に語られる大国主神には、正妻スセリヒメ、越のヌナカワヒメ、因幡のヤガミヒメ、タキリビヒメ、カムヤタテヒヒメの五人の妻と、トリトリノカミを娶っており、神婚伝承が多く、艶福家であったことを挙げている。またスセリヒメやヌナカワヒメとの、情熱的な唱和歌による神事劇についても、縁結びに繋がるものとしていっている。

また、出雲では十月を神有月ということから、全国の神々が集まり、一年間の幽事を相談する、とされた。男女の縁結びについても、このとき、神議り(かみはかり)により決められるものとされ、縁結びの信仰が広まったとしている。

このほか、日本書紀の一書に、大国主神の子は、皆で一八一人いると記されており、子どもさんから縁結び神とされた、との説もある。

一方、中世から江戸期に広まった、「七福神」信仰によるものとする説も根強い。神仏習合

期大国主神は、大きな袋を担ぐ姿や、「だいこく」と同じ音から、大黒天とされ、その子の事代主神は、鯛を抱えた商売繁盛の神恵比寿とされた。七福神の大黒様と恵比寿様にみなされ、幸せをもたらす事から、縁結びの神とされたというものである。

これら諸説は、いかなる過程を経て、今日に至ったのであろうか。

出雲大社は江戸期に入り、「縁結びの神」とされ、多くの参拝者を集め始める。この信者拡大を担ったのは、御師達であった。御師は国造家に繋がる下層神職で、大国主神の神徳を説き、参拝者を募った。秀吉の朝鮮出兵時に、所領を六割削減され、さらに遷宮費用の調達に苦労した大社は、より多くの参拝者を集めざるを得ない、経済的背景があった。御師が世話をする参拝客の大半は、一般民衆であり、彼らを参拝に赴かせるには、切実な願いを叶える、ご利益が必要であった。当時においても、縁結びは、民衆にとって関心が高く、大国主神を、一家に幸せを運ぶ宝船に乗った七福神の大黒天に擬して、縁結びの神として説話したのであろう。御師としては、誰にも分かりやすく、参拝者を募りやすかったものと思われる。

大社による由来が受け入れられるは、江戸中期以降、国学や復古神道の興隆からである。特に明治十年代祭神論争により、大国主神の幽冥界主宰論が、広く行き渡った後のことからと思われる。出雲神有月に、全国の神々

## 祝出版

瀧澤 中 著

『「幕末大名」失敗の研究』

株式会社PHP研究所

本体価格七四〇円

## 政治力の差が明暗を分けた

彼らはなぜ、時代の中心から転落したのか

第1章 徳川幕府が気づかなかつた売国

への道く井伊直弼と田中角栄

第2章 生き残った山内容堂、殺された坂

本龍馬

第3章 「真珠湾攻撃」なき戊辰戦争で失

敗した、松平容保

第4章 西郷隆盛にとつての、「島津久光」

という失敗

第5章 水戸藩と長州藩、維新さきがけの

組織疲労

が集結することは、江戸初期の国造家文書に記載があり、中世から十月の重要祭祀として行われていた。しかし、神議りと結び付け、それを民衆に説明し理解させるには、やはり大国主神幽冥界主宰論が広まる必要がある。あり、明治以降のことと思われる。

それにしても、五月の婚約発表から、十月の挙式に至るまで、国造家の慶事は、縁結びの神としてのご利益を、多くの人々に証明してみせた。世界にも類が無い、万世一系を続ける、両家の結婚は、縁結びのご利益としては、これ以上のものはなかった。八四代続く国造家より歴史があるのは、皇室しかないのだから。

平成二五年五月、出雲大社では、大遷宮の最大行事である「本殿遷座祭(せんざさい)」が行われた。いつの時代からか、この遷座祭の翌年は、「おかげ年」といわれ、恩恵・お蔭が増す年とされた。旅行業者が、大々的に参拝者を集めるキャンペーンを繰り広げていた、まさにその時期に、国造家の慶事が発表され、挙式が執り行われたのである。これにより、大国主神のご神徳を、改めて、世に強く示したことになったのである。

挙式の二週間後参拝に訪れた時、ご神徳を求める若い女性や、今度の慶事にあやかり、良縁を願う中・高年の夫婦で混雑し、どこもなく華やいでいた。名物の出雲そば屋も、一時を過ぎていたのに、並ばなければならいほど繁盛していた。これからも、出雲大社を参拝する人々が、全国から集まるのであろう。

(つづく)

### 参考文献

『出雲大社』(千家尊統 学生社)

『出雲国造家文書』(神道大系編纂会)

## 祝出版

新井 宏 共著

『遙かなる和鉄』

日本鉄鋼協会創立百年記念出版

慶友社 本体価格二五〇〇円

日本鉄鋼協会「鉄の技術と歴史」フォーラムでは、過去十八年間の活動の中で提出された六百余編の論考や報告書から十二編をえらび『遙かなる和鉄』として二月に出版しました。十四年前に書いた新井さんの論考「古代・中世の鉄価」も収録されています。